

「ことばは人となって」

ヨハネ 1：1-14

神田 明美

（導入）

皆さん、おはようございます。アドベント第三主日を迎えました。来週はいよいよクリスマス、イエスキリストが私たちの世界に、私たちのところに来てくださったことを覚えて、お祝いする日ですね。祝う準備はできていますか？

先週も第三礼拝で転入式があり、5名の方が神の家族に加えら、朝の水曜礼拝でも1名の方が加えられました。そして、今日も第二礼拝・第三礼拝でも洗礼式が行われ、6名の方が神の家族に加えられようとしています。

今日も皆さんと、この神の家族が加えられた喜びを味わいつつ、クリスマスの喜びを共に祝い受け取っていきたいと思います。ヨハネの語るクリスマスを通して、今日もご自分から私たちに近づいてきてくださるイエス様を、またそこに溢れる父なる神様の私たちへの愛を発見していきましょう。

では、一緒に本日の聖書箇所を見ましょう。新約聖書ヨハネの福音書 1：1-14 の御言葉です。聖書をお持ちでない方はスクリーンにも出ますので、そちらをご覧ください。では、お読みします。ヨハネの福音書 1：1-14

ヨハネ 1：1-14

- 1 初めにことばがあった。ことばは神とともにあった。ことばは神であった。
- 2 この方は、初めに神とともにおられた。
- 3 すべてのものは、この方によって造られた。造られたもので、この方によらずにできたものは一つもなかった。
- 4 この方にはいのちがあった。このいのちは人の光であった。
- 5 光は闇の中に輝いている。闇はこれに打ち勝たなかった。
- 6 神から遣わされた一人の人が現れた。その名はヨハネであった。
- 7 この人は証しのために来た。光について証しするためであり、彼によってすべての人が信じるためであった。
- 8 彼は光ではなかった。ただ光について証しするために来たのである。
- 9 すべての人を照らすそのまことの光が、世に来ようとしていた。
- 10 この方はもともと世におられ、世はこの方によって造られたのに、世はこの方を知らなかった。
- 11 この方はご自分のところに来られたのに、ご自分の民はこの方を受け入れなかった。
- 12 しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとな

る特権をお与えになった。

13 この人々は、血によってではなく、肉の望むところでも人の意志によってでもなく、ただ、神によって生まれたのである。

14 ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。

(本文)

○アドベントの意味

皆さんは、自分という人、アイデンティティをどのように見つけましたか？私は、クリスチャンホームで育ちましたが、イエス様を自分の救い主として受け入れる 14 歳までは、自分のアイデンティティを国が出す国籍という紙切れに、また親の顔色や言動に、友達の評価の中に、見つけようとしていました。なので、どれも時々によってコロコロ変わってしまいます。

人は自分のアイデンティティを見出すのに、互いに傷つけあってしまいます。「あの人よりは自分の方が上。」「あの人よりマシな人生を生きてる。」「あの人よりマシな進路や職場。」「あの人よりはできてる」「あの人よりは信仰ある」など、クリスチャンも例外ではないでしょう。私たちは、私たち人が作り上げた基準によって互いを評価し合います。

でも、聖書は、そんな世とは違うことを語るんです。イエスキリストが私たちのためにしてくださったこと。栄光、力、神としてのあり方を捨てて人となり、私たちの身代わりに十字架にかかれたという驚くべき恵み、私たちの理解を遥かに超えた恵みの出来事を語ります。つまり、私たちの代わりに罪の罰を受けるため、私のところに、横に来られたということです。

韓国のある番組の中に、頑張っている青年たちを励まそうという企画で、頑張っている青年たちが仕事をしていたら、そこにその青年の好きな芸能人や有名人が訪れ、一緒にご飯を食べ、会話をし、頑張ってる青年を労り、喜ばせ、励ますという番組がありました。でも、ここに出てくる青年の条件は、「頑張っている」です。

でも、イエス様がきてくださったのは、私たちが良くやってるからでもなく、たくさん努力したからでもなく、ただイエス様が私たちを愛しているがゆえにしてくださったことだというのです。

そして、その代価としてイエス様が私たちに願われたことは、「父なる神様が私たちをとっても愛しておられる」ということを信じ、その愛を受け取るということだけです。

人たちは言います。「あなたがどうするかを見て、あなたを愛するかどうか決める」と。「あなたが頑張った分だけ、人に認められる。だから努力しろ。」と。「あなたの実力が能力であり、あなた自身だ」と。

でも、世が私たちのことを、私たちの言動によって評価し、私という人間の価値を決める時、唯一イエス様だけは私たちの存在そのものを愛され、人として来られ、その生涯をもって、ご自分のいのちをもって、それを証明されました。

そして、これは約 2000 年前、地球の反対側のイスラエルという地でのみ起こった出来事ではなく、今、この時も私たちの人生において起こっている事実。そして、また来ようと準備し、時が満ちるのを待っておられるイエス様がおられる。これがイエス様が来られた日、クリスマス待ち望むアドベントの意味です。

○ことばなるイエス様（1－3節）

そして、そのクリスマスの出来事、クリスマスの主人公イエス・キリストをヨハネらしく紹介し、イエス様は完全な神であり、また完全な人として、私たちの救い主として来られたということを証しているのが、ヨハネの福音書1章1節からの御言葉です。

ヨハネは初めのうちは「イエス・キリスト」という言葉を使わずに、イエス様を紹介します。1－2節では、「ことば」がイエス・キリストだと紹介し、イエス様は、初めから、天地創造される前からいたと。そして「神とともにあった。神とともにおられた。」と父なる神様と一緒にだったと。それだけでなく、「ことばは神であった」イエス様も神様だったと伝え、そのイエス様が、父なる神様と一緒に天地万物を造られたと3節で語り、読み手に創世記を思い出させながら、イエス様がどのような方かを伝えます。神様はこの世界を創られる時、「光、あれ」というふうにことばを使われましたよね。そのことばがイエス様だったということです。コロサイ1：15－17でもパウロも同じように言っています。

○いのちであり光であるイエス様（4－8節）

そして、続けてヨハネは、イエス様にはいのちがあったと。いや、イエス様はいのちそのものであり、そのいのちが現れたと。そのいのちとは、死んだら終わりのいのちではなく、死んでも生きる永遠のいのちだと紹介するんです。ヨハネは **Iヨハネ1：2**でもこのように言います。「**このいのちが現れました。御父とともにあり、私たちに現れたこの永遠のいのちを、私たちは見たので証しして、あなたがたに伝えます。**」

このイエス・キリストという“いのち”が私たち人の光。闇の中に輝き、闇が打ち勝つことのできない光だと、イエス様のことを「いのち」や「光」という言葉で紹介するんですね。

イエス様も、ご自分のことや使命を「いのち」「光」を使って弟子たちに紹介している内容があります。それも、十字架にご自分がかかれることを伝えた後にです。

ヨハネの福音書 13：46 「わたしは光として世に来ました。わたしを信じる者が、だれも闇の中にとどまることのないようにするためです。」

ヨハネの福音書 14：6 「わたしが道であり、真理であり、いのちなのです。わたしを通してでなければ、だれも父のみもとに行くことはできません。」と。

そして、本物のいのちであり、光であるイエス様が私たちにその光を信じ、受け取りなさいと招かれました。ヨハネの福音書 12：36 「自分に光があるうちに、光の子どもとなれるように、光を信じなさい。」と。

○すべての人を照らすまことの光

今日の箇所にもどり、9節では、イエス様のことが、光は光ですが、それも「すべての人を照らすそのまことの光が、来ようとしていた。」とイエス様のことと、クリスマスのことを伝えています。まことの光。その前の8節を見るとバプテスマのヨハネが紹介されていますが、彼は光ではなかったとあります。この世にはまことの光とそうでない光がある。そして、光を、イエス様を明かす者がいる。それがバプテスマのヨハネだけど、人たちは彼のことでも光だと間違えてしまう。でも彼は光じゃなく、光を証する者。光である方はイエス様のみということなのです。

そして、現にまことの光であるイエス様は、ずっと、天地創造の前からおられたけど、人たちは、イエス様という光を知らず、気づけず、また受け入れなかったという、世の、民たちの現状を語ります。

でも、その中にこの光を、イエス様を受け入れた人たちがいるんです。ヨハネ 1：12 今日第二礼拝・第三礼拝で洗礼を受けられる方達がありますが、イエスキリストを私の主と信じた人、私たちも、この12節の「この方を受け入れた人々」に含まれています。そして、私たちも、神の子どもとなる特権を受け取っています。

○イエス様の光

では、すべての人を照らすまことの光、イエス様の光ってどんな光ですかね？どんな光かと考えて私の頭に浮かんだのは、ルカの福音書 2：8以降に出てくる羊飼いたちが見た主の栄光でした。ルカ 2：8-9。真夜中、羊の夜番をしていた羊飼いたちがいたところを照らした主の栄光。この時の羊飼いたちとその周りを照らした主の栄光はほんの1割というのか、一部だったと思うんです。10割、100%だったら、羊飼いだとか、全人類が気づくレベルだと思うので。でも、その主の光を見た羊飼いの反応はどうだったでしょうか？「彼らは非常に恐れた」とあります。

それは、住民登録にすら漏れてしまっていた羊飼いたちでしたが、彼らにも「神を見た者は死ぬ」という意識があったからだと思うんです。出エジ33：20では「あなたはわたしの顔を見ることはできない。人はわたしを見て、なお生きていることはできないである」と神様が言われたことが書かれていて、出エジ34：29-30では、神様と話したモーセの顔が輝いていて、モーセに近づくのを恐れたとあります。これが主の栄光を見た本来の人たちのリアクションです。羊飼いたちもそうでした。それは、私たちが罪人だからです。神様の聖さに耐えられないからです。この光の前では隠せるものなど何もなくさらけ出されちゃうからです。

そんな恐れ、怯えていた羊飼いたちに、御使いは「恐れることはありません。」と言います。この言葉によって、羊飼いたちの恐れでいっぱいだった心に変化が出てきます。そして、続いて語られた大きな喜び、ルカ2：11の「今日ダビデの町で、あなたがたのために救い主がお生まれになりました。この方こそ主キリストです。」という知らせによって、羊飼いたちは、「わたしをさばく、滅ぼすはずの光」からくる恐れを「わたしを救う、暖かく包む愛の光」からくる喜びへと変えられていったのです。

そして、主の栄光を見て最初とっても恐れた羊飼いたちは、急いでマリアとヨセフ、そして御使いが言った通りに、飼葉桶に寝ているイエス様に会いに行きます。彼らがそこで目にしたのはなんでしょう。

最初に見た大きな光ではなく、小さな光でした。なんなら、大人の姿で現れ、御使いたちの時のように、きらびやかな、誰でも気づけるような光としてくることもできたのにです。でも、イエス様は、人間の中でも一番力のない、弱い存在として、その生涯を、救いの、愛の働きを始められました。

力、お金、地位、強さ、権力が支配する時代と世の中に。力じゃなく愛で、強さじゃなく弱さで、圧迫や恐怖ではなく謙虚さで。死・滅びではなくいのちを与える者として。闇を深めるのではなく、闇を照らす光として、私たちが救い導き、治めるために。ピリピ2章にある通りです。

試みられ、苦しむ私たちを助けるために、ご自分も自ら試みを受け苦しむ道を選ばれたイエス様（ヘブル2：18）。日常生活に埋もれてしまうような小ささの光としてこの世に来てくださったイエス様。見過ごしやすい小さな光。それでいて、見過ごしたことに気づかず、見過ごしたとしても後悔しないほどの小さな光。小さいけど、確かにあったかく、見た者に大きな喜びを、愛を、希望を、そして救いといのちを与える優しい光です。イメージで言うと太陽のような光が一本のろうソクの小さな光となってきたイメージです。

でも、この光を見出した者には、人生を、自分の内側をガラッと変えられちゃうほどの光。状況に左右されず、だれも消すことのできない、消えることのない光。大きな恐れが恐れでなくなり、大きな喜びに変えられることが約束されている光。

この小さいのちと愛と希望と救いに満ちたまことの光を、マリアが受け取りました。理解できず、準備も全然できていなかったけど、ただただ御使いを通して語られた良き知らせ、神様のことばを信じ、神様の御心に完全に従うと言うこと。そして、「どうぞ、あなたのおことばどおり、この身になりますように」（ルカ 1：38）「この身をもって主の恵みを体験できますように」という信仰告白を通して。ここからイエス様の小さな光は、広がっていきました。

そして、それがヨセフに伝わり、羊飼いたちに伝わり、東方の博士たちに伝わり、イスラエルの民たちだけでなく、異邦人にも伝わり、人たちが頭だけでなく、体をもってその恵みを体験したことが、この新約聖書のいたるところに書かれています。その光が今日私たちのところまで届けられ、受け取っているわけです。

ヨハネ 1：14 「ことばは人となって、私たちの間に住まわれた。私たちはこの方の栄光を見た。父のみもとから来られたひとり子としての栄光である。この方は恵みとまことに満ちておられた。」

このイエス様が人となり、私たちの間に、私のうちに住んでくださいました。私たちがこの光を受け取る時、「救い主のいなかった地」が、職場、学校、家庭が「救い主のおられる地」へと変えられていきます。イエス・キリストといういのち、愛に溢れる光が、私たちの闇を、恐れを喜びに。絶望を希望に。死・滅びを永遠のいのちに。神のみ怒りを受ける子らを神の子らに変えてくださるのです。

その光であるイエス様の私たちへの言葉を最後にご一緒確認しメッセージを終わろうと思います。マタイ 5：14-16。「あなたがたは世の光です。山の上にある町は隠れることができません。また、明かりをともしして升の下に置いたりしません。燭台の上に置きます。そうすれば、家にいるすべての人を照らします。このように、あなたがたの光を人々の前で輝かせなさい。人々があなたがたの良い行いを見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようになるためです。」

神様は、私たちにイエス様という光を与えてくださいました。イエス様は、光でない私たちをご自分が私たちのうちで光輝くことを通して、世の光としてくださいました。そして、人々がこの光を見て、天におられるあなたがたの父をあがめるようにという使命を与えてくださいました。ひとり子を私たちのために送ってくださった父なる神様と、私たちのために全てを捨てて来てくださったイエス様の変わらない大きな愛を、また光を受け取りましょう。

そして、この地には、私たちの周りには、まだこの光が届いていないところ、光を、私たちと同じように、イエスキリストを必要としている人たちが多くいます。光がないゆえに闇の中をさまよい歩いている方達が多くいます。

そんな闇の中にいる人たちに、私たちもマリアやヨセフ、羊飼いたち、東方の博士たち、12弟子、パウロ、そして、めぐみ教会の信仰の先輩方に続いて、この消えることのない光、闇が打ち勝つことのできない光を分けに出ていきましょう。